

IAUD Newsletter vol.2 第2号 (2009年5月号) 目次

1. <i>towards2010</i> 2010年国際会議開催に向けて ～成川新理事長（国際会議実行委員長）に聞く～	1
2. 丹青社が取り組むユニバーサルデザイン～ハード、ソフト、そして心のUD～	6
3. Case Study・標準化研究ワーキンググループ ～IAUD・UDマトリックスをWeb化、UD開発者をいつでもどこでもサポート～	13
4. 世界のUD動向：Include2009参加報告、【UD2010ウォッチング】ほか	17

新特集テーマは“*towards2010*”

2009年度に入り早くも1か月が経過しましたが、本誌も先月号で2008年度の活動報告を終え、本号から新しい企画をスタートします。来年度に第3回国際UD会議というIAUDとして最大のイベントを控え、2009年度の主な活動は国際会議にターゲットを絞って展開されていきます。そこで年間の特集テーマを“*towards2010*”として国際会議開催に向けた各界の動きや期待を、自治体関係や省庁関係のインタビューや国内外のUD関係者の寄稿などで構成していきます。

また「世界のUD動向の」なかに【UD2010ウォッチング】というサブコーナーを設け、4月に活動をスタートした国際会議の実行委員会の動きを追っていきます。

towards2010

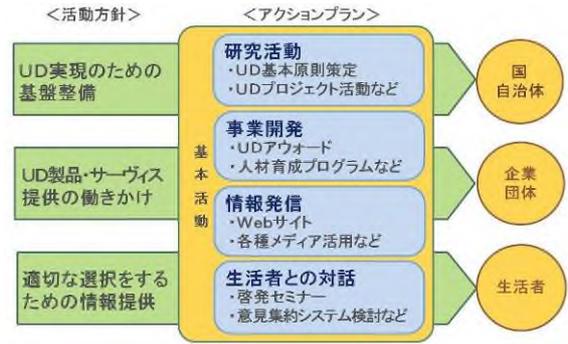
2010年国際会議開催に向けて

～成川新理事長(国際会議実行委員長)に聞く～



第3回国際ユニヴァーサルデザイン会議 2010 第1回実行委員会の様子(4月23日大日本印刷(株)会議室にて)

2009年度の活動計画や予算が決まり、体制も吉浜前理事長から成川新理事長に代わるなど、いよいよ具体的な活動がスタートしました。中期活動計画として掲げた「UD実現のための基盤整備」を実現するため、「国や自治体と連携した活動」「UD製品・サービス提供の企業・団体への働きかけ」「製品・サービスの適切な選択ができるよう生活者への情報提供」、という3つの方針のもと、具体的な活動への取り組みを本格化させることとなります。こうした中で2009年度のIAUDの活動は、これまでのものに加え、大きなイベントである2010年国際会議を視野に捉えた部分が大きな軸となってきます。



IAUD 中期活動計画

Newsletterの本年度の特集も“**towards2010**”という統一テーマを掲げ、国際会議開催にむけて各界の動きや日本での国際会議開催に対する海外からの期待などを取り上げていきます。

初回となる2009年5月号は、4月に発足した国際会議実行委員会の委員長も務められる成川新理事長に、第1回実行委員会の終了直後、新体制としての抱負と今後の活動に対する思いなどを語っていただきました。

と き：2009年4月23日 17：00～18：00
 場 所：大日本印刷(株)五反田ビル会議室
 お話し：成川匡文 IAUD理事長
 聞き手：川原啓嗣 IAUD専務理事

—4月より成川理事長の新体制がスタートいたしました。今年度は、IAUD本体の業務もさることながら、2010年の国際会議の前年でもありますので、昨年度以上に忙しくなることが想定されます。そこで最初に、今後の抱負や特に力を入れたいことなどについてお話いただければと思います—



成川：あっという間の1ヶ月でした。理事長への就任については、大変な時期に引き受けたなというのが率直な気持ちです。まずはこのように厳しい経済状況の中ではIAUDの収入面に不安が募るのは確かです。またこのような不況に見舞われれば、企業はユニバーサルデザインという切り口よりもっと他の事へと目を向けてしまいがちで、その逆風の中でIAUDを運営していくことは大変だなと思っています。また、だからこそやり甲斐があるとも言えるでしょう。さらに1年半後には国際会議が控えていて、全体の枠組みづくりや資金集めに苦難することが予想されます。またそうした中でも、

どうやって国際会議を成立させるのか、そのための枠組みづくりをどうすべきかなど、理事の皆さんと努力していかなければならないことの種は尽きないと思っています。総裁を初め上層部の皆さんからは、こういう時期だからこそ「手作りで」ということが求められています。苦しい状況であることは理事の皆さんと同様に感じてはいますが、できない理由をあれこれ考えるのではなく、どうすれば皆でやっていけるのか、出来るのかといった気持ちを皆さんの心の中に沸き起こすことが私の役割でもあると思います。

次に、理事会の運営を効率化したいと思っています。理事の方々には、業務でお忙しい中を遠方から来ていただいています。言わば理事会の内容のリストラクチャーが必要であり、やるべきことを選別する。それによって理事会の時間を短縮し、また開催頻度も再考した

いと思っています。審議する議題を取捨選択し、理事の方にかかる負担を軽くしていきたいと考えています。もう少し検討して近いうちに提案するつもりです。

IAUDの会員の皆さんに今後も様々なご協力をいただけるようにするには、会員であれば企業であれ個人であれ、自分のためになる、また世のため人のためにもなるということをもっと訴求していかなければならないと思います。会員を増やし活動資金を集めるにはそれが必要です。具体案の一つとしてはIAUDのWebサイトをもっと訴求力のあるものに作り変えなければならないと思っています。

次に国際会議に向けたIAUDの活動の方向性についてです。国際会議はIAUDの活動にとって非常に重要なものです。2006年の国際会議を受け4年後の2010年に再び国際会議を開催するわけですが、IAUDの今年度と来年度前半の活動は、そこに向けて日頃の活動成果をどのように結集させるかだと思っています。研究開発企画部会と各種事業委員会の活動成果をどのように結集・誘導していくかが私や活動を統括している理事に問われていると思っています。

—IAUDも設立されて6年目に入りますが、設立当初メンバーの多くが入れ替わってしまい、現在は半数もいない状況です。設立当初に掲げた理念や思いをどれだけ伝えきれているのか、どれだけ一団となって世の中に訴えかけていくのかなどについて、新しいメンバーを含めて再度、合意形成を図る必要があると思います。2010年という良いタイミングで国際会議があるわけですから、皆さんの熱意をうまく引き出してベクトルを合わせていくことが必要なのではないのでしょうか—

成川：それは重要な視点だと思います。設立当初から継続して関わっておられる方は、私自身も含めて余りいるわけではありませんので、当時の熱意は知る由がないし伝わらないと思います。しかし、評議員会での評議員の方々特に最初から関わっている方々の発言に接すると、設立当時の熱い思いを感じ取ることができます。それを伝えるのが自分の役割のひとつではないかと思っています。副理事長、理事長を経験することにより、総裁、会長、議長などのお話、お考えを伺える機会が増えましたが、理事会での議論とは少し異なったステージでのご意見が聞けたと感じています。現在の経済環境下では、企業の論理に基づく考え方が色濃くなることは止むを得ないとは思いますが、IAUD設立の目的はそれだけではないはずです。IAUDのDNAのようなものを作り上げていくことも私たち執行部の役割ではないかと思っています。



—会員企業や理事の方々から、余りにも会議が多すぎるという声があります。効率的な運用が必要だと思いますが、一部にお役所的な雰囲気が出てきているとの懸念の声が寄せられています。組織運営のやり方を考え直す必要もあるのではないかと思います—

成川：新しい体制になったことをひとつのチャンスと捉えて、新しい発想による改革を考える必要があると思います。先ほども少し申しあげましたが、いろいろな知恵を導入していきたいと思っています。

—昨今の経済状況を踏まえれば、来年の国際会議の開催について考え直すべきだとの意見も一部ありましたが、総裁や評議員会の方々の思いをきちんと伝える必要がありますね—

成川：当然のことながら、これまでと同様な考え方で国際会議を開催すればよいとは考えていません。経済情勢の厳しいことは十分に理解されていますが、だからといって国際会議を開催しないとはお考えになっていません。国際会議は継続して開催すべき、ただし厳しい情勢だからお金をかけずに「手作り」でやる、しかし貧弱なことはしない、と並々ならぬ熱い思いをお持ちです。まさしく勇気付けられることだと思います。IAUDは何のために設立されたのか、何をすべきかなどについて大きな熱い思いをお持ちです。それを私たちは伝えなければならないと思っていますし、そうでなければもったいないと思います。総裁や会長・議長にはインタビューに登場していただく機会をつくることも必要ではないかと思っています。そうやって盛り上げていかなければ、このように厳しい時代では人もお金も元気も出なくなっちゃいますよね。

—国際会議を開催することは、準備段階を含め苦労が非常に多いのですが、達成感は大きいところがありますので、何とか一丸となって切り抜きたいものですね—

成川：終わってからだけ楽しいのではなく、作っていく段階でも楽しくなければならぬと思います。今回もそうなりたいですね。



また現在のように厳しい経営環境であれば、企業内での判断基準が従来以上に厳しくなっていること、さらにIAUDの窓口となっている方々が、IAUDの理念と企業としての立場の間で苦労なさっていることも十分理解しています。しかし、先程お話したように、違う思考・思想を見せて気づいてもらうことも重要だと思います。

本日の国際会議実行委員会では、展示会について議論がいろいろありましたが、実施する方向に向いているのは非常にありがたかったと思っています。IAUDに対する海外からの評価は高く、2006年の国際会議の講演集を見ても展示会に対する期待には大きいところがあります。自信と自負を持って、工夫しながらきちんとやらなければならないと思います。

—IAUD設立当初の趣旨や思いを再度確認することも大事だとは思いますが、現在はその当時と状況がかなり異なっています。その状況変化に対してどう考えるのかという視点が必要ではないでしょうか—

成川：かなり状況が変わっているので、企業として資金を出して参加するからにはメリットがなければという考え方も強くなっていると思います。IAUDとしても、その状況を十分認識した対応をしなければならないでしょう。他の様々な側面も考慮して、総合的に判断されることだと、また、していただきたいと思っています。

—会員になることのメリットと情報の公開に関してはどのように考えるべきでしょうか—

成川：これは法人化と絡んでくる問題です。IAUDの設立趣旨から考えますと、最終的には公益法人化を目指すべきだと考えています。そうなった場合、会員とはどういう存在となるのか、また情報を会員に限定することが本当に可能なのか、良いことなのかという問題が想起されます。基本的には、情報をオープンにする方向に進むのだと思いますが、オープンにするタイミングが問題ですね。

—各プロジェクトに参加するメンバーが最近減ってきています。このような活動に参加しなけれ

ば、会員としてのメリットを受けることが出来ないと思います。こういった状況に対して、IAUDが会員に期待することは何でしょうか

成川：プロジェクトの活動の詳細はわかりませんが、先程お話ししたIAUDの設立の趣旨や首脳陣の思いなどが、そこで話されることは余りないのではないかと思います。部会長の指導の下、そのようなことも是非議論していただきたいですね。会議に参加するモチベーションが企業にとってのメリットだけに限られてしまうと少し寂しいですね。

—Webサイトやサロンの活用を通して、部会やPJの活動をきちんと伝えていくことも重要ですね—

成川：会費を払って会員になれば「部会などの活動に参加できます」となっていますが、活動に参加することは具体的に何が良いのか、メリットは何かなどをよく伝えることが重要だと思います。また、プロジェクトなどで検討・話し合っている熱気を上にも外にも伝えることも重要です。やったこと全てでなくて結構です。活動をPRするための情報を提供していただくとのスタンスで、Newsletterに掲載するようなことも考えなければなりません。またWebでは会員限定ページではなく公開ページのところに掲載することも考えていきたいと思っています。その際は、見た人が会員になろうという気になるような、臨場感のあるものにしたいと思っています。

—PJ側からも会員限定ではなく、情報をもっとオープンにしたいとの話もあります—

成川：それは、どんどん進めてほしいと思います。ノウハウに関わる場所は無理だとしても、PJメンバーの同意があれば、公開の方向に進んでください。また熱気のある会議の雰囲気やWebに掲載して、多くの人に伝えることも検討してみたらどうでしょうか。サマリーを英文化して掲載することもあるかもしれません。これらは情報交流センターの業務かも知れませんね。

丹青社が取り組むユニバーサルデザイン ～ハード、ソフト、そして心のUD～

株式会社丹青社
クリエイティブコア・IDS
センター長 洪 恒夫

1. 社会交流空間の創造

丹青社は内装や展示などの空間を手掛けている会社です。その業務範囲は、ショップやレストランなどの商業施設から博物館、博覧会、アミューズメントスペースまで多岐にわたっています(図1)。また、これら業務の企画、デザイン、設計、製作、施工まで、広範な業務を担うことから、ある時は建設業、ある時はサービス業など、時々によって業態も緩やかに位置づけられています。もし一言でくるとするならば総合ディスプレイ業と呼ぶことができると思いますが、丹青社は人とのコミュニケーションが起こりうる場所すべてを業務範囲と考え「よりよい社会交流空間の創造」をテーマに、様々な空間づくりのソフトからハードまでをトータルにお手伝いをしています。



図1：丹青社が扱う施設

2. 空間づくりとUD

空間はメディアの一つです。その場所を訪れた利用者に対し空間を使い、つくり手側からのメッセージの発信を行うコミュニケーションメディアと言えます。

このメディアの特徴は他のメディア比べ人を包み込むほどの大きな規模であることと、パネルを見る、椅子に座る、音を聴くなど、五感をフルに使った演出ができるため、メディアを構成する要素や担うべき機能が多くあることがあげられます。つまり、これらが複合的に訴求する複雑なメディアでもあるということです。また、その多くがその都度それぞれの目的に応じ、白紙から考えカタチを描く作業により生み出されていることも空間メディアならではの特徴と言えます。したがって、私たちが手がける空間、提供するモノやサービスにおけるUDは、工業製品などと違って固定化された姿やパターンのもものが少なく、顕著な

形として見えづらいことが特徴といえます。一方、要素のほとんどが人と接触を持つものであるといっても過言ではないため、UDを追求するうえでは、完全な正解が見出しにくいものでもあります。私たちのものづくりも、以前は専門家の論理で考えたものを提供するという発想が多かったように思います。しかし最近では、使う方々にいかに満足し納得していただけるかという観点から企画、デザインしていくことが重要となっています。これは、「すべての人が使いやすい」というUDの考えに通じるものと考えられます。したがって、私たちの業務においてUDは重要なファクターであり、今後その傾向はますます強まっていくと考えています。

3. 丹青社が提案するUDと創業の精神

私たちの業務では様々な場面でUDとの関わりが生まれます。そこには「ハード—姿勢、かたち」だけに留まらず、グラフィック、映像、造形などにより情報を伝達することを目的とした「ソフト—情報やメッセージの伝達」、さらには心理的な効果を確実に高める「心—メンタルな効果の創出」の要素が存在すると考えています(図2)。

前述のように、空間は複雑なメディアであるため、各々の役割、目的を果たしながら、目標を確実に達成するためには、何が必要でどのような配慮が望まれるのかを明快にすることが不可欠です。特に、UDの基本姿勢である「すべての人が使いやすい」という発想に基づくならば、使う側の立場で「もてなしの心」を持ち、誠実に丁寧なそれらの具現化に向けて取り組む必要があると考えられます。

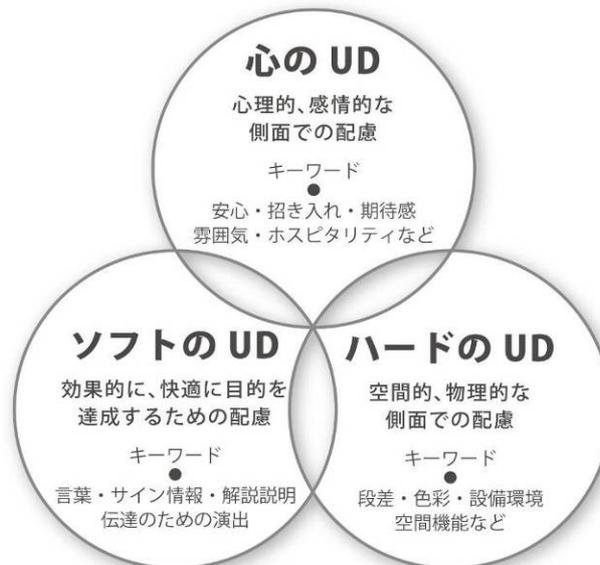


図2：丹青社の提案するUDのイメージ

丹青社の社名である「丹青」は、絵画や画家、絵を描くことを広く表した中国の言葉ですが、一方で「丹精込める」という意味も含まれています。「よりよい社会交流空間づくり」のため、お客様と利用者に対して丹精込めたものづくりをすること。それは使う人の立場に立ち、もてなしの気持ちと使いやすさを追求するUDに通じるため、私たちはUDを21世紀の「丹精」と考え、空間づくりに取り組んでいます。

4. 丹青社のUDへの取り組み

丹青社では2002年2月に研究報告書をまとめ、UD7つのポイント(図3)を目標に定め、実施を開始しました。

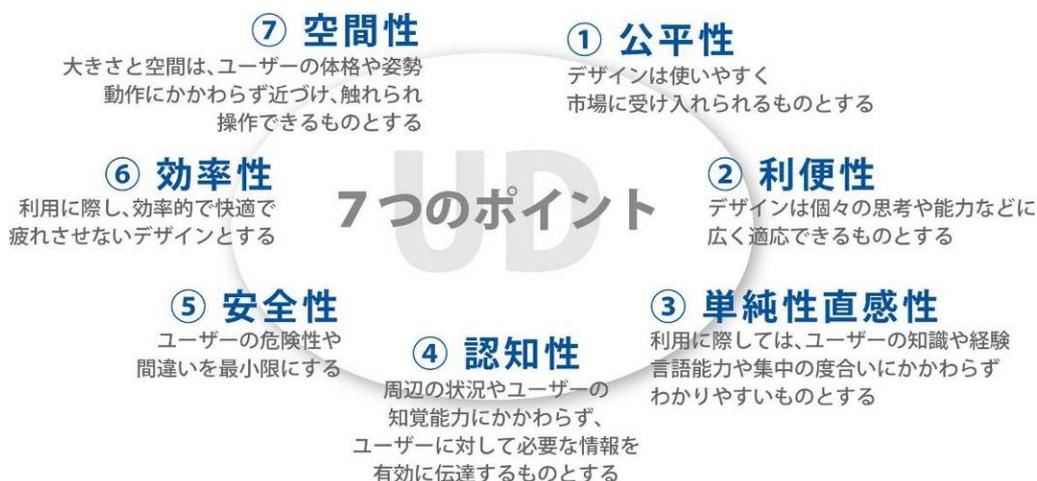


図3：丹青社のUD7つのポイント

その根底にある考えはノーマライゼーションの推進です。これは人類、性別、年齢、身体的条件などにかかわらず自分らしく生きたいところで生き、したい仕事や活動が行える社会こそがノーマル(普通のこと、当然のこと)だとする考え方です。丹青社では、この考えに基づき年齢や障がいの有無にかかわらず、すべての人が安全で快適であるモノ、空間、サービスなどをデザインすることを目標としています。そこでは、目で見てUDとわかることが目的ではなく、接し、体験した時に支障をきたさない工夫や配慮がなされていることを実現することを狙いとします。具体的にはISO14001の認証を得、8項目からなるEMS(環境配慮設計)の項目の一つにUDを位置づけて(図4)、完工時に提出されるレポートを社内の委員会で審査して評価するという活動などをシステム化して実践し、社員の意識向上を図っています。

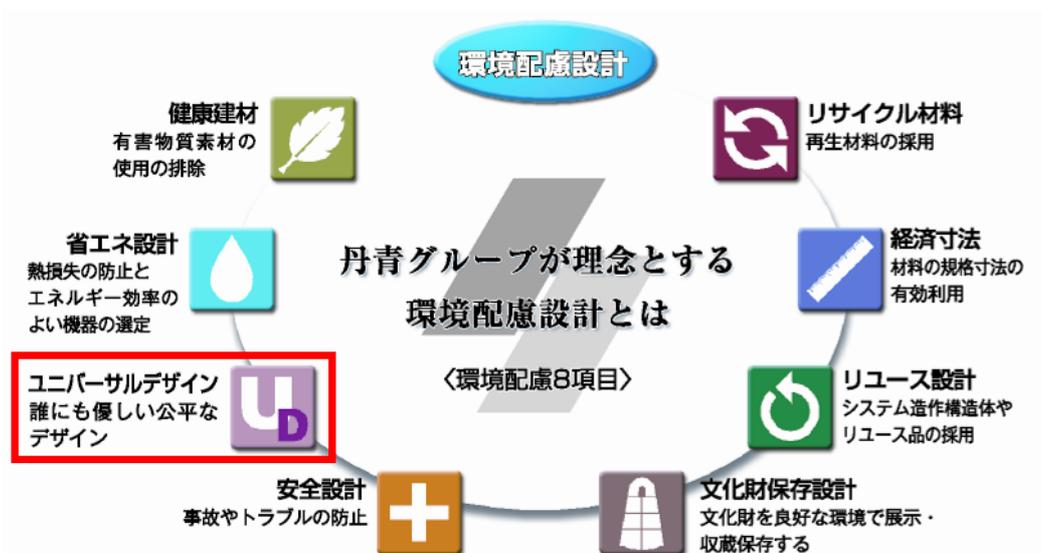


図4：環境配慮設計における8つの項目とユニバーサルデザイン

5. UDに対する思想、取り組みを表現している事例

(1)「ハードのUD」をキーワードとする事例

大人、子ども、車椅子利用の方などの目線や動きを想定したUDは一般的ですが、ここでは実験的に展開した例を2件紹介します。

1つ目は「豊橋市自然史博物館古生代展示」です(図5)。本施設は利用者層として、小学生を中心とした子どもと休日などの親子連れが多く想定されることから、大人と子どもに分けて2種類の展示を同時に展開していることが特徴です。同一壁面に同じテーマの内容を各々の視線の高さやレベルを分けて設置することで理解のしやすさを狙うとともに、親子間などのコミュニケーションの創出を考え、従来にはない幅広い来館者層へのサービスの提供を試みています。

2つ目は国立科学博物館で開催された「ミイラ展」のグラフィックです(図6)。極めて多人数の観覧者が見る状況において、ラベルを通常のものに加えてショーケースの上部も設置することで、ケース前に人が並んでしまっても、そこに何があるのかが確認可能な大量動員の展覧会ならではの工夫を施し、観覧上の利便性を提供しています。



図5：豊橋市自然史博物館古生代展示（撮影：梶原敏美）



図6：国立科学博物館「ミイラ展」展示

(2)「ソフトのUD」をキーワードとする事例

ここで紹介するのは、国立科学博物館におけるUDへの取り組みです。展示の仕方、とりわけ館が伝えたい情報を広範な人々に届けるための様々な配慮がなされています。

国立科学博物館新館においては、子どもたちに対して興味を喚起させたいうえで要点を簡潔に伝えるための仕掛けを施しています(図7)。また、外国人を始めとした様々な方々への情報提供に対応するIT端末(図8)、平易に幅広い方の理解してもらえようように配慮した総ルビを基本ルールとした解説文(図9)、さらには読みやすい字体と大きさのレギュレーション設定(図10)なども行っています。

国立科学博物館日本館では、視覚障害者にも配慮した音声ガイド(図11)や点示説明を併用したハンズオン展示(図12)やグラフィックの表現技術において、色覚障害者の方を想定した色相、配色、色に頼らないパターン表現などのカラーユニバーサルデザインについて、東京大学の伊藤啓准教授のアドバイスのもと独自の研究を行い、計画に盛り込みながら実践しています(図13~15)。



図7：子どもを対象とした解説（アウレット） — 国立科学博物館地球館



図8：子ども、大人、外国人、様々な人に対応したIT端末例 — 国立科学博物館地球館



図9：解説文における漢字総ルビの実践 — 国立科学博物館地球館

誰もが読みやすい文字の大きさは？

■文字の大きさを決める公式

$$\text{文字の高さ(mm)} = \frac{\text{情報までの距離(mm)}}{\text{定数}}$$

■科博では定数180に設定

距離	文字高	文字の大きさ
1メートル	5.6ミリ	16p
1.5メートル	8.4ミリ	24p
2メートル	12ミリ	34.2p
2.5メートル	14ミリ	40p
3メートル	16ミリ	48.6p
3.5メートル	20ミリ	57p
4メートル	23ミリ	65.7p

（※01）
ミリからポイントにする計算式は
文字サイズ（ミリ）÷0.3514＝文字サイズ（p）

ポイントからミリにする計算式は
文字サイズ（p）×0.3514＝文字サイズ（ミリ）

誰もが読みやすい書体とは？

丹 丹 丹
青 青 青

▼

丹 丹 丹
青 青 青

図10：字体、大きさのレギュレーション — 国立科学博物館地球館



図 11：音声ガイド — 国立科学博物館地球館・日本館



図 12：点示説明を併用したハンズオン展示例 — 国立科学博物館日本館

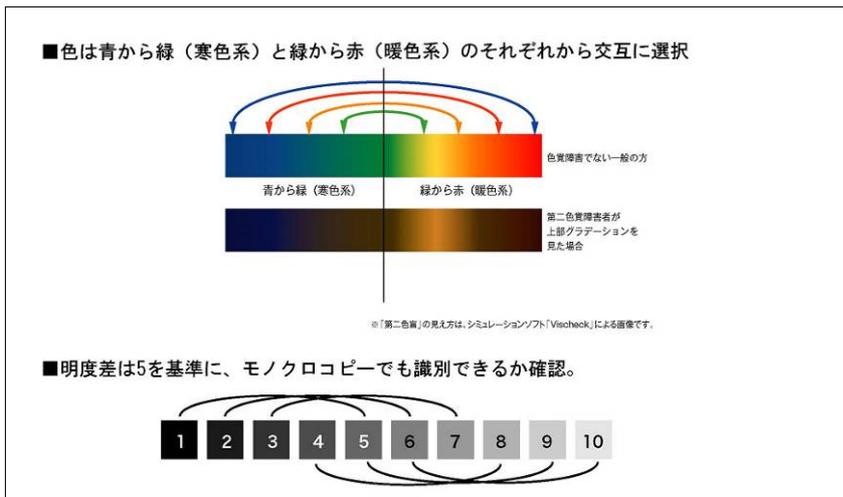


図 13：色相の研究例 — 国立科学博物館日本館

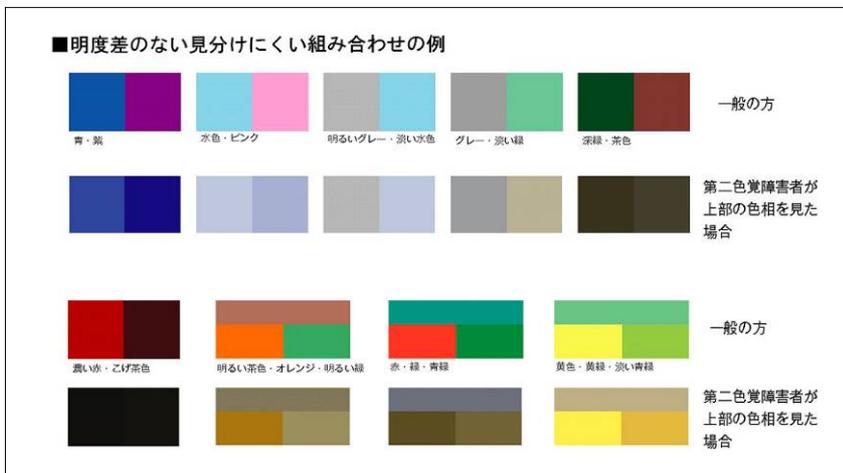


図 14：配色の研究例 — 国立科学博物館日本館

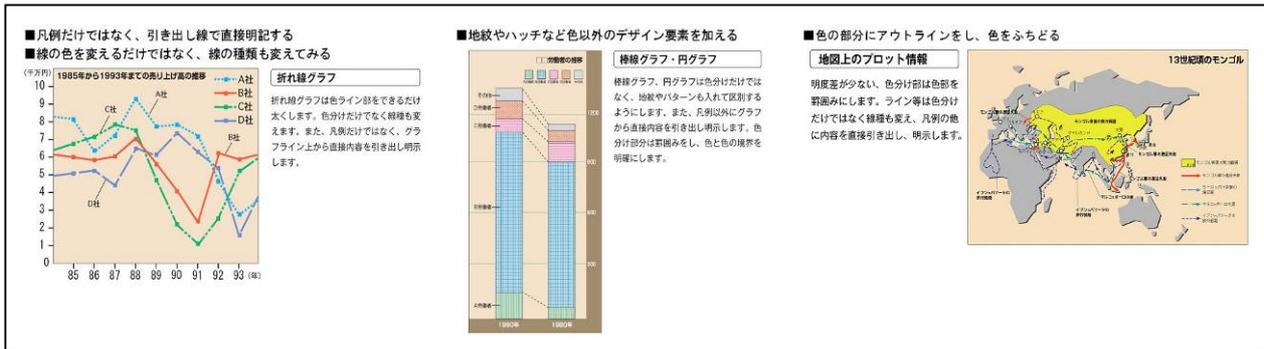


図 15：色に頼らないパターン表現の研究例 — 国立科学博物館日本館

(3)「心のUD」をキーワードとする事例

心のUDを取り込んだものとして、酒田市の「酒田夢の倶楽」を紹介します(図 16)。古くからの米蔵において、歴史的な建造物を遺しながら新しい施設をつくりたいという要望を受けて取り組んだ、資料展示と飲食物販の複合施設です。

この施設でデザイナーは照明にこだわりました。全体の演出照明を炎の色温度に合わせ、文化遺産としての趣を損なうことなく、温もりのある和みの空間を演出しています。訪れる人がホッとくつろぎ、記憶に残るような体験をしていただけることを狙ってデザインが行われました。伝えたいテーマ、メッセージをより効果的に発信し、体験者に受信してもらおうと、このようなエモーショナルな部分の提供もUDの一つと考えています。



図 16：酒田夢の倶楽 内観・外観 (撮影：新 良太)

6. 使う人の立場に立ったものづくり、もてなしの心を持ったものづくり

上記のように「心のUD」は、例えば安心感、期待感、施設のテーマにあった世界観、招き入れのイメージなどを提供する心理的、感情的な側面での配慮という解釈もできます。しかしながら、施設や空間を訪れ、その場での目的を達成しようとした際、できるだけ広範な方々にその効果が如何なく発揮できるための配慮、言い換えれば最善の体験をしていただくための「もてなしの気持ち」こそ、心のUDであり、これらはハード、ソフトのUDも包めた全体に浸透するべき考え方なのだと考えています。

私たちは社会に向けた交流空間を提供するうえで大切なのは、実際に体験する方々にとって「こうであったらきっと良いはず」ということを発想し、人をもてなすという気持ちから考え、つくり、実現させることだと捉えています。そこにおいて目指すべきUDとは何かと考えるならハード、ソフト、そして心のバランスを考慮し、ノーマライゼーションという意識をもってサービスとして提供することなのだと思います。丹青社では、今後も社会交流空間におけるUDを模索しながら、使う人の立場に立ったものづくり、もてなしの心を持ったものづくりに取り組んでいきたいと考えております。

Case study: 標準化研究ワーキンググループ

蔦谷邦夫 富士通デザイン(株)

IAUD・UD マトリックスを Web 化、UD 開発者をいつでもどこでもサポート！

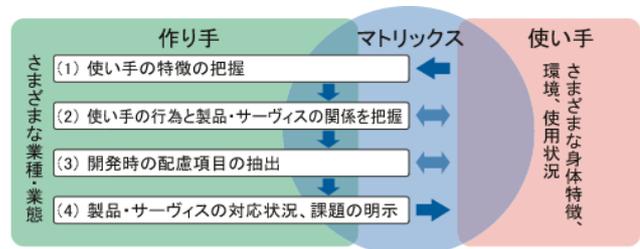
標準化研究ワーキンググループ(WG)では、UD 開発に標準的に利用できるツールとして、「IAUD・UD マトリックス」およびその周辺ツールである「ユーザー情報集」と「事例集」の研究と作成に取り組んできました。この度、UD 開発に関わる幅広い方々に、より手軽に活用していただくため、これまでのエクセルシートに加え、「ユーザー情報集」と「事例集」を Web 化し IAUD 会員サイトで間もなく公開します。具体的な予定はサイトでお知らせしますが、ここではその考え方や使い方などを中心にご紹介します。



IAUD・UD マトリックスのエクセルシートについては、2007年10月に IAUD 会員サイトで公開し、今年2月にバージョンアップしました(<http://www.iaud.net/udroom/archives/0902/27-000000.php> 参照)。また、本誌先月号でも岩片主査からこれまでの経緯を含め紹介されていますので、基本的な考え方や使い方についてはそちらをご覧ください。

■ 利用シーンと課題

IAUD・UD マトリックスの利用シーンとしては「UD の開発」と「UD 対応状態の明示」という2つの場面を想定し、右図のような使い手と作り手や製品などを提供する者が関わる4つのフェイズで捉えています。各フェイズにおいてUD マトリックスの考え方は大変有効ですが、UD マトリックスに含まれるユーザー(使い手)は大変幅広く、ユーザーごとの情報も膨大なものとなるため、UD マトリックスの利用者はケースに応じて対象とするユーザーを絞り込むか、タスクや使い方を限定するなどのカスタマイズが実用上必要とされてきます。



エクセルシートによる IAUD・UD マトリックスは主にそのことを考慮し、大きな表で全体像を見ながらエクセルの機能を利用して表の一部を折り畳んだりタスクを追加できるようにしました。また、その評価結果として、コンパクトに携帯し手軽に使用できること、どんな UD 対応手法が望まれるかのヒントになる事例紹介があると良いという意見から、具体的な事例をビジュアル的にも見やすくまとめた「事例集」を作成したり、現場でより手軽に活用するため、エクセルシートをユ



ユーザーごとに切り分けてカードにし、ポケットファイルでまとめたタイプ（カード式ユーザー情報集・事例集）も試作しました。

これらの形式でもツールとしては UD 開発のプロセスをある程度理解していれば、使用には十分便利なのですが、例えばものづくりの現場、デザイン部門、マーケティング部門などが製販一体となって情報共有し UD に取り組んでいくためには、ツールとして誰でも、いつでも、どこでも手軽に利用できるよう、さらに分かりやすくする工夫が必要と考えました。

■「ユーザー情報集」と「事例集」の Web 化

そこで 2008 年度の活動として「事例集」に掲載する事例の収集や「カード式ユーザー情報集・事例集」の作成につづいて取り組んだのが、これらのツールの Web 化でした。WG でエクセルシートやカード式の長所・短所をまとめ、より使いやすくするためのポイントを整理しました。Web 化することの大きなメリットは見たいユーザー情報や事例をメニューで簡単に選択できる点と、ユーザー情報と事例を自由に行ったり来たりできる点が挙げられます。これらの特長を最大限に活かすことを念頭において、具体的には Web デザインに詳しいメンバーを中心にサブ WG を設け、画面遷移や画面デザインのアイデアを検討し、全体会議で確認するという進め方をしました。実際の Web 制作や画面デザインについては外部の Web 制作会社に発注しご協力をいただきました。

<画面デザインの考え方と操作方法>

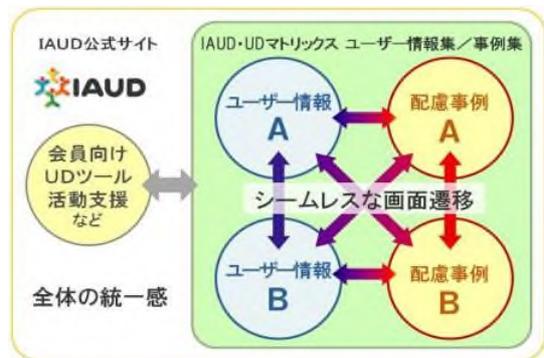
今回の Web 版の一番のねらいは「ユーザー情報集」と「事例集」という 2 種類の情報を Web の特性を生かして見たい情報をシームレスに行き来し、閲覧できるようにすることです。そのため、画面遷移やメニューの考え方についてはそのことを第一優先してデザインを進めました。また、将来的には IAUD 会員だけでなく、一般公開することを前提としているので、UD ツールとして誰でも使いやすく、マニュアルが特になくても欲しい情報にたどりつけるよう分かりやすくすることを心がけ、ビジュアル表現も見やすくシンプルなデザインを目指しました。また、IAUD 公式サイトの他のページとも違和感のないデザインとして、会員活動支援のページと合わせて、手軽に使っていただけることも考慮しました。

トップ画面のデザインについては、何種類かの案の中から WG で検討した結果、右の案となりました。ユーザー情報の大分類を大きく表示し、事例集のインデックス画面へのリンクも同様のサイズで大きく表示しました。

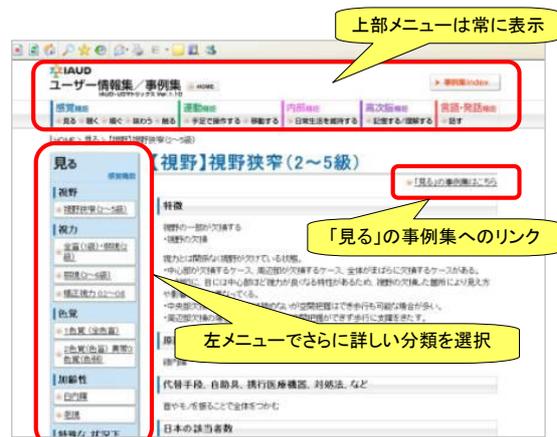
ここからは実際の操作の流れに沿って説明していきます。見たいユーザー情報は、大分類の枠内の「見る」、「聴く」などのボタンから選択します。

例えば感覚機能から「見る」のボタンを選択すると右下のような画面が表示されます。画面上部の IAUD ロゴおよび「ユーザー情報集／事例集」のタイトルとそのすぐ下のメニューの帯は常に表示され、どのページに移ってもトップページと同様のメニュー選択の機能が保たれるようにしています（詳細は後述）。

「見る」の画面では左側に「視野」から「特殊な状況下」まで、さらに詳しい分類のメニューボタンが表示され、選択するとユーザー情報の詳細が表示されま



デザインコンセプト



す。ユーザー情報の内容は「特徴」、「原因となる主な疾病」、「代替手段、自助具、携行医療機器、対処法、など」、「一般的な配慮方法」の4項目ですが、統計数字や人口比率の分かっている項目については「日本の該当者数」についての情報が表示されます。

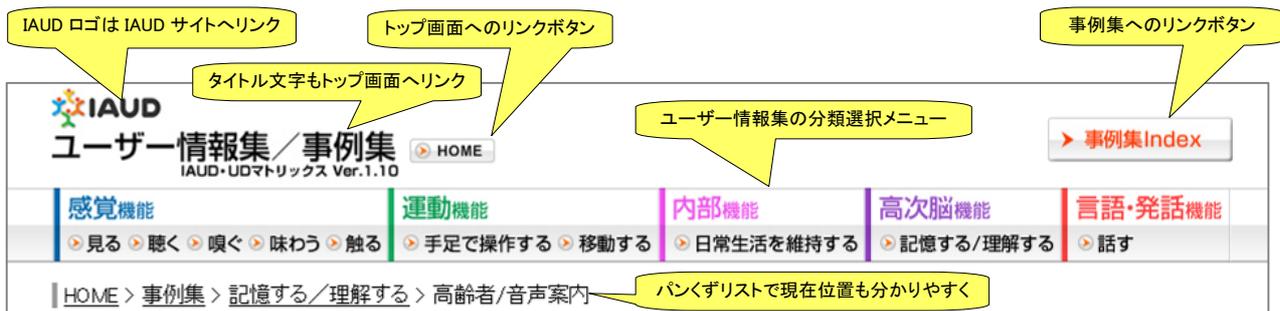
また、すべてのユーザー情報からは対応する事例集へリンクされているため、実際の商品での対応例や配慮の具体例を参照することができます。事例集へのリンクを選択すると右のように事例集の Index と該当する分類の事例写真のサムネイルが表示されます。現時点では事例集の数はさほど多くないため、事例集 Index はユーザー情報集の2階層目までと同じメニュー構成となっています。

他のユーザーの事例を見たい場合は、ユーザー情報集のページに戻らなくても事例集 Index から直接選択することができます。例えば、事例集 Index の高次脳機能から「記憶する／理解する」のボタンを選択すると、右のように該当する事例のサムネイル画面が表示されます。

さらにサムネイル画面から見たい事例を選択するとイメージ画像が拡大され、配慮の対象／内容とその詳細説明が表示されます。また、上の階層と同じく、このページからも対応するユーザー情報を直接見に行くことができます。

操作の概要イメージは以上ですが、最後に上部メニューの機能について説明します。この部分はユーザー情報集、事例集のどの画面でも常に表示されており、下図のとおり、この部分だけで基本的な操作ができるよう考慮しました。帯の中に配置したユーザー情報集の分類選択メニューと、画面右上に表示される「事例集 Index」のボタンで見たい情報を選択できる他、現在位置を直感的に理解するため、パンくずリストも表示されます。左上部の「HOME」ボタンと「ユーザー情報集／事例集」の文字は全体のトップ画面へリンクされています。また IAUD ロゴをクリックすると IAUD 公式サイトが別ウィンドウで開きます。

このように全体として見やすさや使いやすさを考慮して制作しましたが、アクセシビリティに対応したデータの付加の問題や、事例写真のサイズ・解像度の不統一など、時間とコストの関係で対応しきれなかった課題も残されています。これらの課題については、常にユーザー情報を最新の状態にメンテナンスし事例も充実させていくという基本的なテーマと合わせて、今後、継続して取り組んでいきたいと考えています。



■利用シーンによるツールの使い分け

IAUD・UD マトリックスにはエクセルシート形式、カード式ユーザー情報集／事例集、そして今回の Web 版のユーザー情報集／事例集と 3 種類のタイプがある訳ですが、それぞれ一長一短があります。例えば Web 版はネットワークを通してどこでも見られるという大きな特長がありますが、逆にパソコンなどの情報機器がないと見られないため使用環境が限定されるなどです。それぞれの特性を考慮し、開発対象や活用のフェイズ、使用環境や目的などの利用シーン、使用者のスキルや職種などにより、使いやすいタイプをその特長を生かした使い方をするのが良いと考えます。例えば、ユーザーを幅広く網羅的に見る場合はエクセルシート形式、現場へ持ち出して常に手許において見たい場合はカード式、社内の幅広い部門で情報共有するためには Web 版、などの使い分けが考えられます。下の表は参考として 3 種類のタイプの特性をまとめてみたものです。

また、IAUD・UD マトリックスは設計・製造の現場だけでなく、社内教育やデザインを学ぶ学生など教育の場でもユーザーを理解するツールとしての活用が考えられます。その場合でも、3 タイプの特性を生かした利用の仕方が考えられます。

比較内容 ツール名	ユーザー全体像の把握しやすさ	開発対象・目的に応じたカスタマイズ	ツールとしての手軽さ、携帯性	ユーザー情報と事例の関連づけ	多人数での共有、情報管理の容易性	求める情報へのたどり着きやすさ	特筆事項
エクセルシート形式 IAUD・UD マトリックス	◎	◎	○	△	○	○	他の UD マトリックスツールのベースとなるユーザー情報集
カード式 ユーザー情報集／事例集	△	○	◎	◎	△	○	印刷物として扱いやすいため、手許に手軽に置いて現場へも持ち込みやすい
Web版 ユーザー情報集／事例集	○	△	△	◎	◎	◎	ネットワークを介し多人数での情報共有やデータ更新などの管理が容易

◎:非常に適している ○:適している △:適さない面もある

■今後の課題：活用事例のフィードバックと改善のしくみづくり

これらのツールを現場で実際に使用し UD 実践に役立てていくには、さらにユーザー情報を充実させ、使い勝手の改善を重ねて完成度を高めていく必要があります。そのためにはツール自体を眺めているだけでは不十分で、実際の製品など具体的なケースに適用してその結果をフィードバックしてゆくプロセスが必要と考えています。WG でも IAUD・UD マトリックス自体の評価プロセスとして、自動車や各種家電製品など、実際の製品評価でその実効性の検証を行いました。さらに幅広い会員の皆さまにもさまざまな具体的なケースで使用していただき、実績を重ねることで改善につなげてゆくことが重要と考えています。そのためには皆さんの情報をフィードバックする体制やしくみづくりも今後の課題と考えています。ぜひ、皆さまのご協力をお願いいたします。

冒頭でご紹介した「カード式ユーザー情報集／事例集」については、出版事業委員会の本年度の活動の一環として、メディアの UD プロジェクトとも連携し、印刷物としての UD 的配慮やメディアとしての使い勝手の改善も加えながら、出版に向けて検討を進めています。

これらのツールの使い方のワークショップや、実際の製品への適用支援などについても、WG の今後の活動として検討してゆきたいと思っておりますので、皆さまのご意見・ご要望などもぜひ、お聞かせください。



世界の UD 動向

● Include2009 参加報告

古瀬 敏 静岡文化芸術大学

2009年4月5日から8日まで、英国王立芸術大学院大学（RCA）のヘレン・ハムリン・センターで、インクルーシヴデザインに関する国際会議が開催された。これは2001年から2年に一度ずつ開催されており、もとをたどれば、ロジャー・コールマン名誉教授が始めた Design Age にさかのぼることができる研究開発の流れである。会議のテーマは、用語は違うがユニヴァーサルデザインとほぼ同一と考えていい。2005年にはこの会議で IAUD セッションが行われたことを記憶している会員もおられよう。今回は日本からの参加者は3名のみで、会議事務局側の手伝いにも日本人学生の顔は見受けられなかった。大学の講堂とセミナー室、展示ギャラリーをのみを会場として使って運営することから、参加者数は180名程度が限界だが、その故に日本人の参加者が少なかったわけではなさそうだ。

会議の基本的な構成は、朝一番に教員用のラウンジで行われる朝食ディベイト、その後休憩を挟んで講堂で全体会議、それから論文セッションあるいはワークショップ、となっている。これまで会議に合わせて48時間デザインマラソンが行われることが多かったが、今回はそれが無く、代わりにワーク・イン・プロGRESSと言ってセンターの研究者（大学院修了後選ばれて残った者）の担当プロジェクトの発表、そして Health care on the move というセンターの大きなプロジェクトの成果内覧会が設定された。また、初めての試みとして、ガラ・ディナーが企画された。



今回初の試みとして、参加者全員が登録後名前を貼った額縁で顔写真を撮られた。それが直ちに壁に掲示され、顔と名前を一致させやすいような工夫がなされた。

今回の朝食ディベイトでは、何が変わらねばならないか、というテーマで、住宅、構築環境、技術の3つが取り上げられた。講演者の問題提起に対して参加者の中から2名がコメンテーターとして指名され、さらにフロアとのやりとりが続くという形を取った。

住宅では Wayne Hemingway (Hemingway Design 代表、ノーザンブリア大学教授) が英国の公的住宅そして一般的住宅のありようを、デザインも機能も落第と厳しく批判した。まるで監獄のようだ、あるいはエコ住宅でさえ今のデザインでは20年後には取り壊されるのでは、といった鋭い指摘がなされ、それに対してあり得べき代案の議論があった。筆者はコメンテーターとして英国以外の住宅の姿を踏まえての発言を求められ、日本の経験を紹介した。



朝いちばんのセッションは中身は濃い聴衆はくだけた姿勢で聞き入っている。

構築環境では Amar Latif (Traveleyes 代表) が視覚障害者として移動に関わるさまざまな問題点を挙げ、旅行環境が時としてきわめて不合理に運営されていると指摘した。たとえば、視覚障害者のグループ旅行の際に、空港内での移動には通常のバスで何ら差し支えないのにノンステップバスをわざわざ手配され、かえって時間がかかって乗り遅れそうになった経験など、障害者差別禁止法がきちんとした理念として理解されていない状況が未だに続いていることが紹介された。

技術では Michael McKay (Nokia デザイン) が携

携帯電話を軸とした開発のさまざまな視点について述べた。ここでも「カーボンフットプリントかそれとも使いやすさ優先か」というエコロジーに関わる論点が最近の流れの中で強調されるが、大局的に見られているのかどうかいささか疑問、という指摘がなされた。エコを優先しすぎて使えないものは、インクルーシヴ（ユニヴァーサル）デザインから見れば論外ということで、筆者もそれに賛同する。

ワークショップはいくつかのテーマが設定され、専門分野に分かれる形で少人数での議論がしやすいように仕組まれていた。6日はデザイナー主導、7日は学術研究的テーマ、と切り口を変えてあり、それぞれに4つのテーマが提示されていて、どのテーマに参加するかを参加登録後選択することを求められた。自身の興味と微妙にずれがあって、なかなか決めにくかったし、わずか1時間程度の議論と作業とで総括をするのはかなり難しいが、まあそういった制約の中で参加してそれなりに楽しめた。

もちろんこうした会議の中心は、最新の成果などを参加者が報告する論文セッションで、今回は同時に3会場を用いて行われ、それぞれに5論文が割り当てられていた。加えて、何らかの意味でインパクトが強いと判断して査読委員会が選出した6つの論文は、同時進行無しに講堂での発表という試みがなされた。当然テーマは多岐にわたるわけで、全体的な統一性は犠牲になるが、インスピレーションを得るには悪くない試みである。

センターの受託プロジェクト報告である Health care on the move は、とくに救急医療を在宅と結びつける試みで、救急車の中に診療所に準ずる機能を組み込もうという提案が含まれていて、さまざまな形の救急車がモデルとして検討されていた。これに関してはきちんとしたレポートが印刷されて配布された。



health care on the move の展示では、実際に救急車の中をどうデザインするか実物大のレイアウトが用意された。

最終日の閉会式に先立つ全体会議では全体のまとめが行われた。今回の会議のテーマが、“inclusive design into innovation: transforming practice in design, research, and business” ということで、その視点からの総括がなされた。デザイン現場と研究者そして現実のビジネスの連携の悪さは常に悩みの種であって、その当事者たちの対話と意見交換の場としてのこの会議の意義が強調された。また古くからの常連だけでなく新たに若手が加わってきていることが将来展望として評価された。いくつか印象に残った指摘を拾うと、「ユーザーではなく人々を考えよう」、「単なるデータでなく整理された情報が重要」、「サステナビリティが流行語になったがインクルーシヴデザインはそうならないか」、「企業の決定権のある幹部に伝わるようにしないとダメ」、といったものがある。また、「インクルードとエクスクルードをもう一度見直す」、「東西の関係と南北の関係の再考」、「過去の資産・遺産を未来に」といった指摘もあった。いずれにせよ、少しは進みつつあるがまだまだ、というのが総括であった。

また、毎回行われている表彰に関して、業績表彰はケンブリッジ大学のジョン・クラークソン教授に与えられた。これは文句なしの評価である。また、今回は優秀論文、優秀ポスター、優秀発表、そして最優秀提案の表彰が加わって、とくに参加する若手の研究者たちが励まされて元気の出る会議の一つのありようを示したように思われる。

会議関係者との非公式な話で、規模と予算制約のために手話通訳も要約筆記もやれない、会議の性格が純粋にアカデミックでないために発表しても英国内での業績評価が今ひとつ（RCAが研究大学院でない故か）、などが悩みだと聞いた。なお、日本に対しての辛口のコメントとして、なぜ外国の研究者が日本のユニヴァーサルデザインの秀でた点について指摘するまで日本人は

そのことに気がつかないのか、というのがあった。日本人教員がそれを当然としていて、それは他者との関係で強みであって最大限生かすべき、と教育していないからかもしれない。

資料

会議の閉会時に配布されたニュースレター (pdf) は下記からダウンロードできる。

<http://www.hhc.rca.ac.uk/451/all/1/publications.aspx>

また、発表論文は下記より入手できる (論文個別にダウンロードが必要)。論文集には ISBN が打たれており、公式出版物としての性格を確保している。

<http://include09.kinetixevents.co.uk/4DCGI/prog?sess=10766097540226027032009104508&operation=main>



●(株)丹青社が第6回「企業フィランソロピー大賞」の特別賞を受賞！

IAUD 会員の(株)丹青社が、同じく IAUD の会員団体でもある社団法人日本フィランソロピー協会が主催する第6回「企業フィランソロピー大賞」において特別賞として「ユニバーサル社会賞」を受賞されました。

本賞は、2003年に創設され、本業を通じた社会貢献による CSR のベストプラクティス企業を顕彰するもので、同社が取り組む「ユニバーサルキャンプ in 八丈島」の活動が評価されたものです。同賞選考委員会の受賞理由によると「人が安心感を持つ生活環境を創るユニバーサル・デザイン(UD)は、物づくりのみならず、サービス業などの場にあっても、今後ますます求められる重要な概念である。「ユニバーサルキャンプ in 八丈島」は、多様な障がい者、高齢者、子ども、外国人などが一同に参加し、UDに求められる要件を、臨場感を持って追求する場として企画され、立場の違いを超えて共に体験し、考え、しかも妥協のない知見を得ようとする先駆的かつ革新的な取組みであり、真のUDを追求するための壮大な実験の場となっている。また、この体験から得られた知見は行政や企業などで、モノづくりやサービスの前提として生かされており、“より良い「社会交流空間づくり」”を目指す同社の経営姿勢はUDの本質を追及するものとして高く評価できる。」となっています。



「ユニバーサルキャンプ in 八丈島」は NPO ユニバーサルイベント協会ユニバーサルキャンプ実行委員会が主催、東京都八丈島八丈町、(株)丹青社および IAUD 会員でもある(株)UD ジャパンが共催、IAUD も後援しているイベントで、第5回目となる本年も9月12日(土)~14日(月)に開催が予定されています。また、企業向けにはキャンプの事前・事後に研修プログラムも準備されています。



詳しくは以下のサイトをご覧ください。

社団法人日本フィランソロピー協会が主催する第6回「企業フィランソロピー大賞」

http://www.philanthropy.or.jp/contents/activity/corp_award.html

NPO ユニバーサルイベント協会

<http://u-event.jp/index.html>

●世界高齢者団体連盟の日本支部(FOIFA Japan)が国際フォーラムを秋田で10月に開催!

世界高齢者団体連盟(IFA)の日本支部が主催する国際フォーラムが、今年10月10日(土)・11日(日)の2日間、秋田市内の秋田駅に隣接する秋田拠点センターALVE(アルヴェ)にて開催されます。このフォーラムはIFAが召集し、2010年に第10回世界会議の日本誘致をめざしているFOIFA Japanが国際会議に先立ち開催するものです。

詳しくは同団体の公式サイトをご覧ください。

<http://www.foifa.or.jp/japanhome.html>

●IDeA センター(ニューヨーク州立大学バッファロー校)E-ニュースレター 2009年春号より

・IDeA センターが新しいサイトを発表

IDeA センターとUD E-Worldの2つのサイトに分かれており、UD E-WorldではUDについての協働活動をサポートするサイト上のツールを提供しています。

・「リハビリテーション工学研究所によるアクセシブル公共交通に関する研究」(RERC-APT) を発表

カーネギーメロン大学ロボット研究所(RI)とIDeAは、国立障害&リハビリテーション研究所が資金提供しているRERC-APTでアワードを授与したと発表しました。RERC-APTはAaron Steinfeld(RI)とEdward Steinfeld(IDeA)両氏の指導により、障害者が求める交通ニーズに応える実現可能な技術やUDを生かし、効果的で持続可能なプロセスを開発していきます。

・IDeA センターがオンラインで社会人教育2コースを提供

プロダクト、システムのUDに関心のある人なら誰でも参加可能です。

- 1) コアコースⅠ: バリアの本質に関する資料や新人間統計学
- 2) コアコースⅡ: UDに関する詳細情報、UD原則や様々な応用

・IDeA センターとリハビリテーション工学研究所UDスタッフによる冬季会議でのプレゼンテーション

IDeA センターのEd SteinfeldとD. Levine両氏とConcrete ChangeのE. Smith氏は、2009年2月10~17日、アトランタ地区委員会の生涯共同体計画のシャレットに参加しました。

また、Ed Steinfeldが自宅での高齢者向けUDについて講演しました。

・調査研究に参加する2つのチャンス

デザイン効果の測定:建築環境研究プロジェクト

IDeA センターリハビリテーション工学研究所のG. S. Danford博士の研究チームは現在、公共建物、公道と住環境など日常生活での建築環境の影響についてオンラインで研究を進めています。

垂直運動研究プロジェクト

公共建物での傾斜、リフト、エレベーター、エスカレーターの知覚や体験についてオンラインでの研究をします。社会的統合は、身体、言葉、視覚の3つの側面で評価されます。

・出版物に関する最新情報

インクルーシブハウジング:パターンブック(W. W. Norton & Co.)

ヴィジタビリティ:住宅のインクルーシブデザイン・アプローチ(小冊子)

・ダウンロード可能な小冊子

科学情勢:UDでの新しい研究と進展について(Bentham Sciences Publishers Ltd.)

・連邦政府インクルーシブ・ホームデザイン法の最新情報:下院1408ハウジング法案で障害者へのアクセシビリティを提案(Jan Schakowsky議員事務所プレスリリースより)

Schakowsky法案により、運動障害のある人たちへの「公平」と「良識」を模索しています。イ

リノイ州選出の民主党 Schakowsky 議員提案のインクルーシブ・ホームデザイン法は、「ヴィジタビリティ」基準を採用し、運動障害を持つ人たちが利用できる住宅やユーザー補助の増加を目指しています。この法律では、連邦政府の補助を受けて建築する住宅やタウンハウスは、下記要件を満たすよう求められます。これらは新規住宅へは適用されますが、改築へは適用されません。

- ・アクセシブル・エントランス（ゼロステップ）を少なくとも1か所設置
- ・一階の出入り口には全て32インチ（約80センチ）以上の障害物のない通行スペースを確保
- ・車いすで利用できるバスルームを一階に最低1か所設置
- ・車いすで届く位置に電気温度調節器（スイッチやサーモスタット）を設置

【UD2010 ウォッチング】

●第3回国際ユニヴァーサルデザイン会議 2010 第1回実行委員会開催！

2010年10月に静岡県浜松市で開催が予定されている第3回国際会議の第1回の実行委員会が4月23日（木）の午後、大日本印刷㈱の会議室にて開催されました。委員長は巻頭の特集でもお伝えしたとおり、成川新理事長が兼任される他、IAUDの全理事が委員を務めて実行委員会が構成されます。

今回は第1回目ということで、このイベントに関する基本的な理解を深め、推進組織の考え方や進め方などについての同意形成が議論の中心となりました。実行委員会は当面、9月のプレス発表に向けて隔月開催される予定です。今後、委員会の動きや決定された内容などについて、このコーナーで適時お知らせしてゆきますので、ご注目ください。



【編集後記】○日本は65歳以上人口の比率（高齢化率）が2007年に20.0%を超えて世界第一の高齢社会となった。平均寿命が延びて高齢者の数が増えたことと、出生数が減ったことが主な要因である。長生きできる人が増えることは、安全で文化的な生活を送れる国であることの証しでもあるが、少子化は将来に向けて様々な問題を投げかけている。若者、女性、高齢者の就業を促進し労働力人口の減少の緩和を図ることが、少子高齢化に伴う課題に対する対策だと言われている。この切り口を少し広げ、意欲と能力のある人にそれなりに仕事をしてもらい、また仕事ができるようにする、という視点を加えると新たな視界が開けてくるのではないだろうか。ファミリーフレンドリー、ダイバーシティ、ワークライフバランス、と進化発展してきたこれまでの論議も、ユニヴァーサルデザインの視点を加える必要があるのではないだろうか。（矢）

○やっと暖かくなってきたと思った矢先、また寒さがぶり返し、今度は豚インフルエンザの問題が世界中を震えあがらせています。経済恐慌や環境問題など、今や世界のどこにしようが地球規模の問題に追いつかれ、逃れることが困難な世界に住んでいることを思い知らされます。さまざまに分断されていた世界をグローバル化することで効率化が進み、人々の移動が活性化したり、便利になったりすることが沢山ある半面、マイナス要因があつという間に世界中に広がるという、予期せぬ伏兵もそのなかに含んでいました。UDの対象とする世界もUDのコンセプトが形成された時代と比較して、はるかに幅広い生活者を想定しなければいけなくなり、より高次の解決方法が求められています。2010年国際会議の実行委員会がいよいよスタートしましたが、Newsletterの取り扱うテーマとしてもグローバル化に関連したUDという視点が重要になってきたと考えています。（蔦）

IAUD Newsletterでは、誌面を会員の皆さまのUDに関わる情報交換の場と位置づけています。ぜひ、会員企業のUD商品開発事例やPJ/WGの活動成果事例等の情報をお寄せください。また、国内外のUD関連イベント、シンポジウム等の開催情報もお知らせください。ご連絡は、news@iaud.netへ直接、メールをお送りいただくか、事務局あるいは情報交流センターまでお問い合わせいただいても結構です。

無断転載禁止

IAUD Newsletter vol.2 No.2
2009年5月1日発行
国際ユニヴァーサルデザイン協議会

事務局 : 225-0003 横浜市青葉区新石川 2-13-18-110
電話: 045-901-8420 FAX: 045-901-8417
e-mail: info@iaud.net
情報交流センター: 104-0032 東京都中央区八丁堀 2-25-9
(IAUD サロン) トヨタ八丁堀ビル 4階
電話: 03-5541-5846 FAX: 03-5541-5847
e-mail: salon@iaud.net